**１．序文に変えて**

近年、日本と中国で古鏡銘研究が激しく進捗している。日本は京都大学「中国古鏡の研究」 班が 2009 年から 2011 年にかけて前漢から西晋までの鏡銘集釈を 5 冊に纏めた。前漢から

西晋までの 500 年間を、漢鏡一～七期、三国と晋に区分し、総数 600 鏡銘を取り挙げ、全

ての銘文の脚韻を整理した。また、難解な鏡銘の文字一つひとつに「省字」や「繁字」、「仮 借」、「古文」、「析字」、「同じ（「精明」は「清明」に同じ、と使う）」、と注釈をつけ、更に、 多数の文献を引用し、詳細な解釈を施した。中国は王綱懐氏が 2004 年から 2010 年までに 私蔵鏡を中心とし、氏のいう鏡友からも拓本を借用し、未公開資料や公開されることの少な かった資料を中心とした三冊の図録を公開した。図録は銘文の字形を篆・隷書も細分し、全 銘文に記載している。更に、部分的ではあるが銘文を見易く拡大している。なお、2010 年 に論文集の『止水集』も公表した。

私は昭和 60 年から漢鏡銘のコンピューター入力を続けており、データ数は 2 万行以上に

なった。清朝の図録以来、同一鏡が何度も採録されており実数は 5 分の 1 から 6 分の 1 程

度であろう。当時を振り返るとデスクトップが会社の部・支店に 1 台であった。機械は IBM5550 シリーズの DOS／V マシンで、12.5 インチフロッピーをドライブに 3 枚入れ、 5 分待ってようやく畫面が立ちあがる。日本語ワープロと表計算のマルチプランしかできな かった。プリンターは 5577Ｆ01。プリンターリボンの時代である。使用できる漢字は第一

水準だけであり、第二水準は通称「イエロ―ブック」と呼ぶ厚さ 2cm の漢字コード本を利 1

用したコード入力だった。この頃は、入力者を囲み入力の勉強をしており第二水準のコード 変換で捜している文字が畫面にでると、観衆が拍手した時期でもあった。鏡銘は勤務時間外 に入力するので、図録一冊入力するのに数カ月かかった。今から考えると恐ろしい程のムダ と思うだろうが、楽しかった。それはコンピューターという文明の利器を使用すること、ま た、入力は横書であり、鏡銘は類型銘が多く、破損や錆の不明文字□が上下関係から推定で きたからである。90 年代にウインドウズが導入され、一人一台のパソコンの時代になると、 インターネット（以下「ネット」と略す）が利用でき、林素晴氏の『漢代鏡銘集録』を知っ た。また、古美術商もネットで商品広告していた。この当時、商品としてネットに流れた三 つの興未ある銘文を掲示しておこう。１．方格規矩鏡で銘文「Ｉ（銘文の形は最後に記載）」 で鈕座銘に「大宜子孫」がある。（九州の古美術商）２．福岡県平原出土鏡と同じ「陶氏作 竟真大好・・」銘の方格規矩鏡。３．環状乳神獣鏡銘で「惟此明鏡、煥竝照明。本出呉郡、 張氏元需。百練于辟、永刻文章。左龍右虎、招福除羌。宜巨相卿。朱鳥鳳皇、百精竝存。其 師命長（修正した）」（関東の古美術商売）である。また、編者は古鏡の蒐集もしており、購 入依頼のあった珍しい二つの鏡と銘。七連弧文鏡「龍氏作竟佳且明、采取善同出丹楊、和巳 銀錫清且明、神師刻之成文章、服之竟兮」。七つの連弧文で龍氏が「神師」と自称した銘文 である。この他に直銘文獣首鏡(双頭龍文鏡の古手)と呼ぶべき鏡で直銘の横、左上と右下の 二か所に獣首面（正面向。反対位置にあるのは龍首の横顔二か所）があり、下“君宜官”、

上逆“官（二字不明）”があったが価格の折り合いがつかず購入を見送った。

さて、この 30 年間、鏡銘を入力してきたが実は、漢文は全く理解出来ないし、中国古鏡 への関心もなかった。その私が鏡銘入力を始めたのは学生時代に、中世城郭の発掘や陶磁器 の指導を受けていた、根津美術館学芸部長だった故奥田直栄先生の指示である。今でも理由 を覚えている。「君は目が悪いから（鑑識眼がない）陶磁器研究を止めたまえ。会社員だか らコンピューターの操作はできるだろう？中国の銘文を研究したまえ」だった。同時に課題 を与えられた。書物名は忘れたが「美術館所蔵と高野山本とに内容の違いがあるがコンピュ ーターでその差を教えてくれたまえ」だった。1 年以上かかって入力し、両者を比較すると 確かに違いがあった。この方法（上下の銘文、文字を比べるだけ）は今でも私なりの鏡銘検 討に生きている。鏡銘を集めて七言句の初句の後三字「甚大好（工）」を探すと、これは三 角縁神獣鏡銘の特徴であるが一部の方格規矩鏡銘にもあり、三世紀の華北鏡銘の特徴と言 いきれる。現状でも「甚大好（工）」を持つ銘文は華南で一面の出土報告もない。また、2014 年は三角縁神獣鏡の長銘に「上有神守」と「上有戯守」と書き分けるグループのあることが わかり、「神守」と「戯守」の違いは他の要素を含めると製作時期差であろうと考えている。 しかも、同一鏡工が使い分けをしていることから、三角縁神獣鏡は連続生産ではないと考え た。

このように銘文を集めて比較すると、その銘文や銘句使用の特性が判明することもある。

鏡銘の文字使用法は冒頭に記載したように京都大学古鏡研究班が通常以外の文字使用につ いて上記のように整理したが、この他にも鏡銘独自で多くの文字が「鏡字（鋳型で反転する）」 2 であり、更に鏡銘の大半に「脱字」がある。鏡工の「誤字」や「記号化文字」など様々な文

字の相違から、類似した銘文で長銘の同一銘や類似銘は同型関係を疑うことができる格好 の資料という側面もある。

私的用途で作成していた銘文集成を今回は文献別の鏡銘一覧とし、今回約六千データを 集成した。これを「漢三国西晋鏡銘集成」として公開する。また、今後はチェック終了した ものから公開する予定である。

さて、中国古鏡は『宣和博古図』など宮廷銅器の筆書に始まり、清朝では拓本を中心とし た宮廷蔵鏡と個人蔵鏡が多数公開された。1960 年代以降、新中国の発掘調査で「清理簡報」 として公表され、その後、地方の博物館に入り、他の館蔵鏡と共に再度、図録で公表される。 現在、続々と公開しており、このため同一鏡が繰り返し現れる。清朝の固人図録も多くは他 人からの借り入れ（拓本か）ており同一鏡が何度も現れる。今世紀は日中共に個人蔵鏡が 続々と図録化されている。その特徴は図像や銘文等、従来にないか、稀なものが多い。銘文 集成を作成・公開するのは、古鏡は古美術品としての性格があり、一度公開されても、その 後、追及できなくなった鏡が多く、公開された時点で採録するのが大きな目的である。また、 古鏡は様々な形で公開されるが、網羅するのが難しくなってきており、捜す時間の手間を省 くのも目的の一つである。古鏡は通常、図録で公開される。90 年代以降、早稲田大学、東 京大学や大学以外の多数の法人がネットで公開している。古美術商のネット利用は上記し

た。古美術商の鏡と良く似た性格でオークションがあり、日中でオークションは多数あり

（中国嘉徳、北京保利、東京中央など）図録化し、更にネットで公開している。日本はネッ トだけのオークションもある。これらは性格上、資料として網羅しにくい。東洋文庫はネッ トで梅原末治氏の考古資料を公開している。先ほど紹介した楽浪出土の直銘文獣首鏡は

003B-0362-913 である。これは楽浪の「鏡鑑」（一部に漁隱洞出土鏡がある）の写真・拓本・ 図、銘文解読四点セットあるが、全部がセットになっているものは少ない。銘文紹介だけの 資料もあるが、梅原氏の資料は重要であり、データベース化している。先に触れたネットの

『漢代鏡銘集録』もデータベース化が終了している。なお、今回の鏡銘公開に編者蔵鏡で未 公開鏡を追加で記載した。

これは 30 年間入力してきた私的なデータベースを見直し、統一呼称と、ｍ値（１平方㎝ 当たりの重さ）、出土地か所有者を追加した。この集成の作業分担は基本的に編者である林 裕己がエクセル入力した資料を利用した（歴史民俗博物館の入力は除く）。なお、今回の文 字使用については環境適用文字を利用し、無い文字については作字せず、横浜ユーラシア文 化館で銘文のチェック時に文字説明を加えた。チェック後、林がエクセルからワード変換し た。

末筆ですが、かって資料を提供してくれた岡村秀典氏、車崎正彦氏、森下章司氏に感謝し ます。

3